



書評

鳥越輝昭著

『表象のヴェネツィア——詩と美と悪魔』(春風社)

藤田 侑一郎 (フリー編集者)

本書は、鳥越教授の『ヴェネツィアの光と影——ヨーロッパ意識史のこころみ』(1994年、大修館書店)、『ヴェネツィア詩文繚乱——文学者を魅了した都市』(2003年、三和書籍)に続く、ヴェネツィアを主題にした三番目の本。2012年年末に刊行された。全11章からなる。

- 序章 カナレットと逃げ出す芸術家たち
- 第一章 バイロンと「ためいきの橋」の出現
- 第二章 『マリーノ・ファリエーロ』と『ヴェネツィアの一晩』の貴族政批判
- 第三章 『夏の嵐』と『ヴェニスに死す』のなかの魔界
- 第四章 『ホフマン物語』——悪魔と鏡
- 第五章 レニエ『顔合わせ』と鏡の照応
- 第六章 L・P・ハートレー——異文化と罰
- 第七章 『旅情』のなかの異文化
- 第八章 ホイッスラーと裏町の詩情
- 第九章 〈死の町〉ヴェネツィア——「死の渦」と〈ゴンドラ=棺〉
- 第十章 ヴェネツィア表象史とディエーゴ・ヴァレーリ
1797年、ナポレオン・ボナパルトの恫喝に屈してヴェネツィア共和国は消滅した。千百年の栄華がついえた。《あとに残ったのは、繁栄したこの町の記憶である。そのときから、ヴェネツィアは「詩」に変わった。…本書が取り扱うのは、もっぱら十九世紀以後の、語られてきた町、描き出されてきた町としてのヴェネツィアである。すなわち、表象の〈ヴェネツィア〉。》(まえがき)

目次が示すように、絵画、詩、オペラ、映画、小説などの世界で、ヴェネツィアが、どう見なされ、どんな背景を提供し、なぜ他の都市とは著しく異なるイメージの発信装置たりえたのか、著者の筆はすこぶるゆっくりした足取りで考察を進めていく。

前二著でも引用文が多かったが、本書も同様である。後註の冒頭に「以下、本書の中の引用はすべて原文からの拙訳である」とある。引用文が、著者自身の文章に溶け込んでいるので、本文がぎざむリズムを妨げることがない。読者は、安んじて、静かな水面をすみやかに進む小舟のような文体に身をゆだねることができる。私も「心

地よい文章だ」と感じながら読み進めていた。

第五章に至って、フランスの詩人・小説家アンリ・ド・レニエのエッセイ集『ヴェネツィア暮らし』の、こういう文章に出会う。《ヴェネツィアでは、大きな心地よさに包み込まれるから、ひとは、すぐに、一種の静かな幸福感のなかで生きようになり、一種の友好的なくつろぎと、控えめな喜びと、やさしい感謝の気持ちとのなかで生きようになって、そこはかたない快樂を感じざるをえない。》(p.182)

集中の白眉は、第七章『旅情』のなかの異文化であろう。恋愛映画の古典、デヴィッド・リーン監督の『旅情』は、キャサリン・ヘプバーン扮する米国の中年女性が、積み立てたお金で待望の欧州旅行に行き、ヴェネツィアで、妻と別居中の商店主(ロッサノ・ブラッツィ)と恋に落ち、敗れて去る、という筋だった。アーサー・ロレンツの『カッコーの季節——喜劇』という作品が原作。異文化の相互理解は不可能だ、というテーマが原作にはより鮮明に出ているという。異文化とはなにか。米国人女性は「恋愛は結婚に直結すべきだ。結婚したら不倫は許されない。愛が冷めたら離婚すべきだ」という立場。商店主のほうは「結婚は恋愛が前提ではない。結婚中も、それぞれが別の相手と恋愛をしておかまわない。愛し合っていないことは離婚する理由にならない」というもの。「お腹がすいているときに、ラビオリを出されたら、ピフテキが食べたいなどと言わずに、ラビオリを食べるんです」という有名になったせりふが、そのことを端的に表現している。

《この世の最大の喜びはヴェネツィアを訪れることである。それに次ぐ喜びは、ヴェネツィアについて書いたものを読むことである》(前著まえがき)。四度目の喜びの時間はいつ与えてくださるだろうか。

装丁(毛利一枝)が、ためいきが出るほどすばらしい。

